

【報告 2】

“総合政策学部”でのユニバーサルデザイン教育 —関西学院大学での試み—

高畑 由起夫

(関西学院大学総合政策学部教授)

1. はじめに

関西学院大学総合政策学部教員の高畑です。

初めにお断りしておきますが、私は“障がい学生への学習支援”について全くの素人でした。自然人類学と動物生態学が専門で、研究対象は霊長類、つまりサルです。それではサルの研究者、あるいは人類学者が学習支援にかかわることで、何か良いことがあるのか？ 今思い返すとサルや人間の行動を観察することが、教育現場で「障害のある学生さんが具体的に何に困っているのか？」を知ることに結びついたかもしれません。一方、人類学とは「人間の社会組織がどのように機能しているか？」調べる学問です。このことは、障がい学生が直面するトラブルを減らすため「支援体制をどう組み立てて、運営するべきか？」考えるのに適していたかもしれません。

さて、今日皆様にお話するのは関西学院大学総合政策学部において、学習支援のシステムを白紙の状態から立ち上げた経緯と実態です。我々が開発した方法を紹介しながら、“総合政策”の立場から「学習支援を大学教育にどのように位置づけるべきか？」を議論します。最後に、現在残されている課題（というよりも、課題がまだまだ山積みですが）について、皆さんとともに考えたいと思います。

なお、今、ドラゴンスピーチという音声認識ソフトを使って、私の音声を文字化した文章をスクリーンに映しています。このソフトは、例えばビデオ

の字幕づけに実用化しています。ビデオをPCに取り込む際（キャプチャと呼びます）、同時に再生される音声を復唱して、それをこのソフトでテキストファイルに変換し、字幕原稿に使います。ご覧のように、前もって準備していない文章をアドリブでしゃべると、かなり乱れます。また、教室ごとに音響特性が違うので、初めて使う教室ですと変換ミスがどうしても多くなるようです。

もう少し言い添えると、この音声認識ソフトをリウマチで手が不自由な同僚の先生に紹介したところ（この方も障がい者に相当するわけですが）、それ以来原稿をこのソフトで作成しているそうです。いったん声で入力してから微修正すれば、ほとんど問題がないそうです。このようにソフトや機器によって障害をカバーすることにも、様々な可能性があります。もし、ここにいらっしゃる方の中で、情報系の学生さんや先生方がおられたら、是非、こうしたソフトの開発や現場への応用等に取り組んで頂きたいと思います。

それでは、「総合政策学部でのユニバーサルデザイン教育の試み」というテーマで、我々の活動を紹介しましょう。話の順番として、まず、イントロダクション＝どんな経緯で試みが始まったのか、簡単に触れたいと思います。それから、我々が開発した方法を説明します。次に、今日のシンポジウムでは、我々の修学支援に「“大学らしさ”、つまり“関西学院らしさ”または“総合政策学部らしさ”がどのように反映されているのか？」について解説して欲しいとのことでしたので、とくに“総合政策”という視点から見た修学支援を考察したいと思います。なお、総合政策学部ユニバーサルデザイン教育研究センターでは、学部生に活動やスキルを紹介するためにホームページを作っています。URLは<http://www.ksc.kwansei.ac.jp/~z96014UD/>ですが、ご関心がある方はご覧いただければ幸いです。

2. 総合政策学部での学習支援の経緯と実態

それでは、最初に「障害」とは何か？そして、どんな支援が必要か？という点から話を始めます。日本学生支援機構のホームページ等を参照する

と、実に多様な障害があることがわかります。視覚障害、聴覚・言語障害に加えて肢体不自由、発達障害、病弱（内臓疾患）、これらはそれぞれ異なる支援対象・方法があります。また、同じ障害でも、この教室のように大講義での支援方法と、ゼミのような小講義でのそれとは微妙に異なりますし、学生生活一般にも支援が必要です。

ところで、私は、総合政策学部では学生主任という立場にあります。この仕事の対象は“勉強”より、むしろキャンパスライフです。ふつう、学習支援とは“教務主任”が扱うはずなのですが、どういうわけか、私が担当するようになりました。経緯としては、2001年に四肢が不自由で電動車いすを使う方が入学しました。当時から私は学生主任だったのですが、その方をたまたま私の基礎演習のゼミでお世話することになりました、それがきっかけです。その後、聴覚障害の方が2名（1名はまだ在学中）、視覚障害の方が1名入学されて、その流れからか、もっぱら私に対応するようになりました。結果的には、これは良いことだったかもしれません。つまり学生主任としては、一般的な学生生活から勉強、そして（うまくいっているわけではないけど）就職まで広い範囲をカバーしなければいけません。その結果として、“障害”を広い視野で扱うことが出来たかもしれません。私はこの他に（制度的にではなく）個人の教員として、他者とのコミュニケーションが難しい学生とも、何人かかかわってきました。なかにはうつ病かと思われる方もいらっしゃるし、てんかんの方も、発達障害かもしれない方もおられます。

さて、視聴覚に障害を持った3名の学生はかなり重度でした。その方々に対応するため、多少紆余曲折がありますが、総合政策学部では“ユニバーサルデザイン教育研究センター”という組織を立ち上げて、それから、関西学院大学全体では教務部にキャンパス自立支援課を設けて、制度的に取り組もうということになりました。

あらためて4年間を振り返ると、まず、教職員も、利用学生も、学生スタッフもみんな“素人”だったと思います。それは今も変わりませんから、私自身、このシンポジウムでも先ほどお話になった倉本先生を初め、他の方々から色々学ばせていただきたいのです。私どもの活動の特徴の一つが“素人

だった”こと、これは短所だったわけですが、あるいはひょっとしたらそれなりに良いこともあったかもしれない。そのあたりはおいおい説明します。

2番目に、“現場対応”に徹しようとしてきたことです。“ボトムアップ”、つまり、サポートする学生スタッフからの提案、現場からの声をできるだけ取り上げようとしてきました。何と言っても、障害がある学生さんに一番つき合っているのは学生スタッフです。その彼らの言葉を聴いて、提案はとりあえず検討すべきでしょう。もちろん、提案は玉石混淆なのですが、学生スタッフがオン・ザ・ジョブ・トレーニング(OJT)で経験を積んでいくなか、その結果をボトムアップで取りあげていく。そういう面で、学生も教員も職員も、学生スタッフも利用している障害がある学生さんもみんな“研究者”である、と言えるのではないのでしょうか。

一方、聴覚障害の学生さんは、二人とも普通の高校で勉強されてきました。特別のサポートを受けることもなかったなので、したがって、支援される体験も初めてでした。「どんなサポートが自分にとって良いのか？」というでも、彼ら自身が手探りだったわけです。思い返すと、一人目の方と二人目の方に

あらためて振り返ると

**1. みんな素人だった
教職員も、利用学生も学生スタッフも！
＝良さも欠点もともに**

**学生も教職員も、
みんな主役!!**

**2. 現場対応／ボトムアップ
＋OJTに徹した
＝学生スタッフも主役**

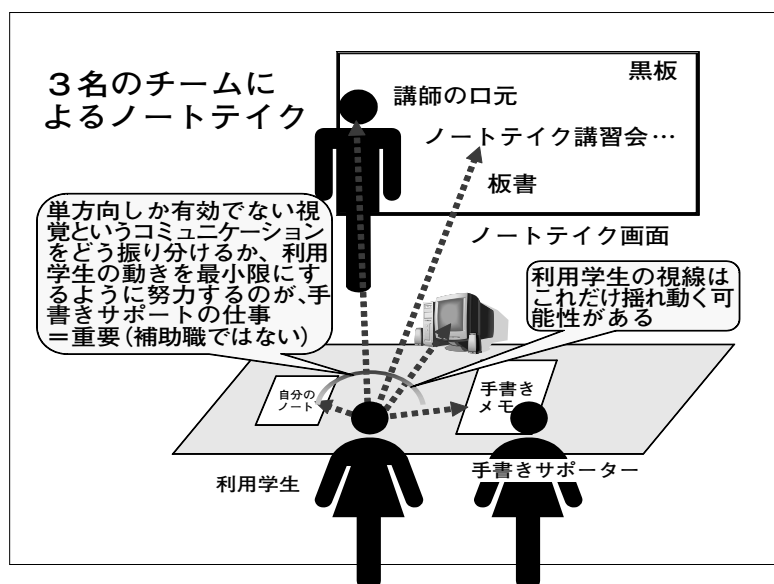
**3. コーディネートの重要性
＋効率的な連絡システムの構築**
①授業の内容、形式、教室の状況、機材・
運搬等オペレーショナルな部分
②刻々変わる状況への即応体制
③多様なステークホルダー間の調整

は、多少の違いがありました。一人目の方に対しては、私たち自身も「こんなサポートで果たして良いのか？」と自信がなかったし、受ける側としても「これで良いのか？」、あるいは「どこまで要求できるのか？」わからなかった＝どちらもモデルが掴みにくかった。それが、二人目となると、ある意味、先輩を“モデル”として、サポートを受けながら勉強するスタイルをすぐに身につけることができた、とも言えます。

3番目に、やはりコーディネートの重要性を感じました。“ボトムアップ”にしても“トップダウン”にしても、様々なステークホルダー（利害関係者）がそれぞれの立場から出す意見をできるだけ取り上げて、しかも効率的に最適な策を展開しなければならない。とくに「システムをいかにうまくつくり上げていくか？」と同時に「刻一刻変わる状況にどのようにしたら即応できるのか？」、これらの点においてコーディネートが非常に重要でした（素人の私が、こんなことを皆さんに話すのは、まるで「釈迦に説法」のような感じがして、恥ずかしくなるのですが）。

さて、現実到我々がやっている支援スキルを説明しましょう。大きく3種類があります。まず、聴覚障がい者のためのPCノートテイクとビデオの字幕づけ（すでに40本ほどのビデオに字幕をつけて、いろいろな形でストックしてあります。できればサーバーに保存して、授業などで簡単に使えるようにしたいのですが、著作権法の関係で難しいところがあります）、そして視覚障害の方のための点訳作業です。

総合政策学部でおこなっているPCノートテイクについては、「ちょっと変わっている」とよく言われるのですが、3名のチームで行うのが特徴です。“PCテイカー”の2名が交替でパソコンに入力する一方で、もう1名“手書きサポート”をつけます。これが“要約筆記”とどう違うか、説明が難しいので、ビデオを少しお見せします。



ビデオに映っているのは、実際のサポート現場を後ろから撮った映像です。教室の最前列で、2名の“P Cテイカー”が交替でキーボードから先生の発言等をパソコンに入力しています。後列の左側に利用学生、その右側に“手書きサポーター”がいます。なぜ、こんな方法を選っているのか？ 学習支援が始まった頃、私は教室でそれを見る機会がありました。その際、一番気になったのは、利用する学生さんの視線が揺れ動くことです。当然ですが、現実の授業ではP Cのモニターだけを見るわけではありません。先生が使うパワーポイント、板書の文字、あるいはレジュメの図表、先生の話題は次々に変わりますが、こうした動きをモニターに映るデジタルなテキストファイルの文字だけでは、とても伝えきれない。それをカバーするものとして、“手書きサポート”をつけて「先生が今パワーポイントを見るように指示しました」、「先生が“ここ”と言ったのは、レジュメのこの場所です」、「今、パソコンは誤字を打ったけれど、正しくはこの字です」、あるいはP Cで伝えられない図表等、つまり、テキストの文字だけではとっさに伝わらない部分を

伝える仕事を願うことにしました。いわば、“情報のコーディネーター”です。

その一方で、PCタイカーはとりあえずパソコンへの入力に専念してもらう。それでも100%情報を伝えることができるわけではないのははっきりしていますが、利用学生の方が「視線をどこに一体走らせたらいいいのか？」と迷っている状況をなんとか改善してみたかったです。

それでは、パソコン入力でどれだけの情報が伝わるでしょうか？ ある授業でのPCノートテイクでモニターに映ったテキストファイルの文字を、その授業を撮影したビデオテープから起こした文章と比較したところ、モニターに映し出された文字数は、実際の発話での文字数のおよそ52%でした。残りの48%ですが、この多くは同じ発話の繰り返し等、“冗長部分”が多いので、基本情報の7～8割ぐらいは伝わったと考えられます。ただし、先ほども言っているように、発話のデジタル情報だけではこぼれ落ちるものがある。そのプラスアルファの部分を、手書きサポートで補っていく方法を採用しているわけです。

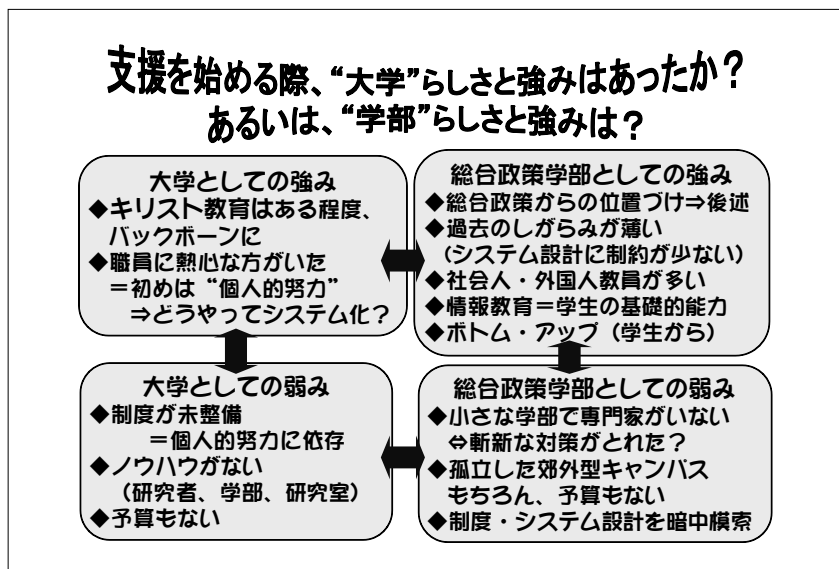
次に、実際の授業で手書きサポートの人が書いたメモを紹介しましょう。学期が終わる時に反省会をしたり、新しいスタッフ希望者に講習会をする。その時に使うため、利用学生の方に“模範的なメモ”を提出してもらい、さらに「こんなふうに書いてくれたら、ありがたい」という希望を出してもらったものです。

その一方で、コーディネートの際の連絡網、Eメールやケータイでのメーリングリスト（ML）も重要です。日々刻々変わる状況では先ほど述べたように、コーディネートが重要ですが、担当の事務、利用学生、学生スタッフ、そしてスタッフ等の都合が悪い場合の代替要員等の間の連絡網を整備していなければいけません。合理化されたコーディネートシステムこそ支援の基本であるというのが私の実感です。

3. “関学”らしさは活かされたか？— “総合政策” という視点—

さて、少し話題を変えて、「修学支援にあたって大学(=関西学院)らしさ、あるいは学部(=総合政策)らしさがあったのか？」考えてみましょう。関西学院大学としての強みといえば、「キリスト教主義教育」というバックボーンをまずあげるべきでしょう。そして、職員の方々の中に熱意がある方がおられた。その比率はやはり高いのではないかと思います。どの大学でも同じだと思うのですが、初めは個人的努力で始まる。それをどうやってシステム化していくか、その段階でこうした“大学らしさ”が支えになっていったと思うのです。

大学としての弱み、これはどの大学も少し前までは同じだったと思いますけれど、制度的にまったく未整備であった。それは私も同様だったわけで、実際にたずさわるまで、修学支援など考えの外であった。そうした状況が、とくに個人的なレベルからシステムのなものに急速に変わる、その臨界点が



たぶんここ10年、あるいは5年くらいのことで、それまで大学はノウハウもなかったし、予算もなかった。それでは、総合政策学部としても強みがあったのか？ まず、創設して10年もたたない学部で、過去からのしがらみが弱かったことが幸いしたかもしれません。何か提案する際も、なんとかそれを実現しようという方向にいくことができました。また、先生方に社会人出身の方、あるいは外国人の方（約3割が外国籍の教員です）が多いことも関係しているかもしれません。英語教育等では、ネイティブの英米系の講師の方々にとってはすでに常識だったり、英語のリスニングをリップ・リーディングで代替する経験がある方もいた。さらに情報系の教育の充実で、学生スタッフのタイピングの早さ等、基礎的能力が高いという本当に具体的なこともあります。

つよみの最後に、“ボトムアップ”、学生からの意見を集約して、それを活かすことが当たり前である。これは総合政策学部が、開設以来、学生からの色んな提案・企画を学部教育に活かそうとしてきた伝統の一つであることが大きいのではないのでしょうか。もちろん弱みも多々あり、なかでも小さな学部で、しかも孤立したキャンパスで、予算もなく、制度・システム設計を暗中模索した4年間でもありました。

4. “総合政策” から見た学習支援—教学と研究の一体化—

それでは、さらに話を進めて、“総合政策”という立場から見た“学習支援”の位置づけ、という点を説明しましょう。私が授業でよく触れることですが、“総合政策”の基本である“(社会的な)問題の発見・解決”には、多層なレベルからの考察が必要である、ということです。基礎的なレベルからあげると、(1)自然科学のレベル、(2)応用科学のレベル、(3)経済・法・社会的レベル、(4)哲学・倫理のレベル等にわかれるでしょう。言うまでもないことですが、総合政策学部にはこれらのレベルをそれぞれカバーする多様な教員がおります。

例えば、私は先ほど触れた理学部出身のサルの研究者ですから、自然科学

のレベルで“障害”を考えてみます。このレベルでは、障害の“分類”や“定義”も含めて、“原因の特定や解明”があげられます。さらに、私のような人類学者にとって、コミュニケーション科学＝人はどうやってコミュニケーションをとっているのか？ それをベースにして、障害がある方にとっては何がコミュニケーション上のハードルになるのか、基礎的レベルで調べることになります。

しかし、これも授業でよく触れることですが、自然科学だけでは問題は解決しない。当たり前のことです。私がよくテーマに持ち出すのは、「人間は死ぬ」という事実です。どんな人でも死ぬ。その“死のメカニズム”を研究するのが自然科学です。そこには善も悪もなく、単に事実（＝人は死ぬ）があるだけです。一方、生身の人間にとっては「死にたくはない、病気は治りたい」という欲望＝価値観があります。これが医学や保健学等の応用科学の姿勢です。自らの価値観の実現のため、自然科学を応用することが応用科学のベースにあります。

今日の話題に則すと、応用科学のレベルには、障がい者の方々を支援するスキルの開発、ノートテイク法や今この教室でおこなわれている連携入力法の工夫、そのためのソフトの開発、あるいは音声認識ソフトの研究等が含まれます。繰り返しになりますが、ここに出席されている方で情報系の学生さんがいたら、ぜひこういう世界にも取り組んで頂きたい。ついでに、少し脱線すれば、音声認識ソフト等は、実は健常者も（キーボードから解放されて）音声でパソコンや機器を動かすことにつながる。それが、一般の生活に応用されれば、素晴らしいビジネスチャンスにもなるかもしれない。話がそれ過ぎたかもしれませんが、障害がある方もない方にとっても、みんな豊かに生きる可能性がともに広がっていけばよいのではないのでしょうか。

3番目として、政治や経済、法や社会学的レベルがある。修学支援制度の確立や、そのための法的整備もあるし、ノートテイクや情報機器の費用対効果も狙上にのぼります。また、私たちは初めから“有償ボランティア”として位置づけましたが、当然、お金がかかります。予算的な面もきちんと位置づけながら、大学教育をめぐるすべてのステークホルダー（利害関係者）に、

費用対効果も含めて説明しなければなりません。このレベルは、たぶん“総合政策”の一般的イメージにもっとも合致するものでしょう。

最後に哲学・価値観のレベルがあります。「何ゆえに修学支援をしているのか？」についての理論付けです。授業保障制度の価値観的基盤、手っ取り早く言えば“人権問題”として、障がい者の方が教育を受ける権利を保障するという目的を明確にすべきです。そして、最終的には「修学支援をすることは、多様な人間の共存、共生を認めること」であり、単に不幸な人たちを救うためではなく、「みんなであるべき世界に近づく一つの道なのだ」と位置づけることではないでしょうか。

大学教育に話を絞れば、きわめて具体的に、障害がある人にもわかりやすい授業は、健常者にもわかりやすい授業であるはずであり、それはファカルティ・ディベロップメント（FD）の向上につながる（はずです）。“総合政策”としての修学支援をこういう形で位置づけることで、学生も教員も職員も、あるいは父兄も、大学教育に関するすべてのステークホルダー（利害関

“総合政策”から見た学習支援

～教学と研究の一体化～

①自然科学的レベル：何が問題か？
障害の原因＝医学的課題
コミュニケーション科学、etc.

②応用科学的レベル：
障がい者を支援するスキル：
e.g., ノートテイク、音声認識ソフト

③政経法・社会的レベル：
制度の整備、ノートテイク・情報機器
の費用対効果、財政的判断

④哲学・価値観のレベル：
授業保障制度の価値観的基盤
人権・倫理から見た授業保障

きわめて“総合政策”的課題
我々の基本姿勢＝「学習支援を進めることこそ、大学に
も一般学生にも利益をもたらすはず⇒真のFDの向上」

係者)が意見が一致できればと思うのです。利益というところとちょっと場違いに聞こえるかもしれませんが、修学支援はすべての人々に“得るところ”があるものだということです。

5. 残された課題

ただし、残された課題も多い。例えばノートテイク制度にしても、ゼミのように不特定多数で同時発話もあり得るようなシチュエーションをどうするか？ 今のところ、私は、全員チャットでゼミをするか、それとも全員手話を覚えて、手話でおこなうしかないという気がします。それから、ノートテイクだけでは、聴覚に障害がある方に情報を提供しているだけになりかねない。これでは、本当の授業にならないのではないのか。ゼミはとくにそうだけれど、その学生さんが授業に関して発言する機会も保障しなければいけないわけで、それをどうするのか？ 他にも、極めて具体的な事例をあげれば、例えば英語コミュニケーションという授業があります。ネイティブの先生方に支援をお願いしてやっているわけですが、やはり英語教育という立場から言えば、どんな形が良いのか、英語教育に責任を持つ先生はきちんと対処して欲しいと思います。つまり、健常者のリスニングについて、リップ・リーディングをあてるのか、アメスラン＝アメリカン・サイン・ランゲージを覚えてもらった方がいいのか？ 視覚障害についても同様に課題が山積みであるということを自覚することが必要でしょう。

それではどうやったらブレイクスルーできるのか？ 今、ノートテイクについて一つ考えているのは、先ほど少し音声認識ソフトを使いましたがこれも、これでデジタル化した文章をノートテイク用に開発されたIPtalkに送付して、そこで修正した文章をモニター／スクリーンに映す方法はどうか、と考えています。実際にやってみなければわかりませんが。それから、モニターも現在のタイプで良いのか、それともヘッド・アップ・ディスプレイのような機器を開発すべきなのか？ 現在のスキルや予算では、一種プラトーの状態になっていて、さらにブレイクスルーをするためにはもっと考え

最後に、

1. コーディネートに努めながら、絶えず、
モニタリングによってボトム・アップを
はかり、ブレイクスルーをめざす
＝“家元”にならないように

2. 何のための“支援”か？
＝絶えず自省（初心を忘れず）

3. (あらためて)人の多様性を受け入れること

4. 学習支援
＝終わりのないテーマ
⇒ “研究” としては無限の地平が広がる

これらすべてが、究極のところFDの向上につながり、
全ステークホルダーにとって利益となるように

るべきことが多いようです。

6. 最後に

さらに、今日はほとんど触れることは出来ませんが、発達・学習障害等も含めて、支援の基準を明確化しなければいけない。それはボーダーを引くことになります。私のような人類学者の悪い癖ですが、そこで少し引っかかってしまう。というのは、例えば自然科学で何かに取り組もうとすると、“分類”＝ボーダーを引かなければならない。だから「ここまでは“障害”である／“障害”でない」とボーダーを引く。次に“障害を持っている人”を細かな基準で分けていく。ところが、現実の社会では、その作業が“ラベリング”に成ってしまって、逆にその人達を“差別”してしまうことになりかねない。

話があまりにとんでしまって申し訳ありませんが、これは人類学ではアフリカの民族とつき合うときによくやることです。ある民族を、その中でさら

に細分していく。その結果として、政治的、社会的にいつの間にか差別の構造ができ上がっていく。それと同じ事が生じるのではないか？ 本来は支援するためにボーダーを分けることが、さらなる差別につながっていくということは避けたい。すると、基準を明確化すること自体が良いかどうか、悩んでしまうこともあります。考え過ぎかもしれませんが、人類学者としては、そんなことも考える必要があるかもしれません。

最後に、もう一度強調したいのは、障害がある学生に対するサポートという課題は、健常者としての我々自身を見直すことにつながります（それが人類学の基本理念でもあります）。我々が今所属している大学とは何か？ そこでおこなわれている教育とは、そして、その教育が何を最終目標としているのか？ こういうことを私達はふだん考えないかもしれません。そうした課題をあらためて考え直す点において、修学支援を試みることは、大学教育におけるすべてのステークホルダー全体に、「大学とは何なのか？ 教育とは何なのか？」を再考する良いきっかけになるのではないか、口幅ったい結論で申しわけありませんが、これで終わらせていただきます。

（たかはた ゆきお）

【司会 望月】

高畑先生、ありがとうございました。では、改めまして、少しだけ司会を交代します。ここから後半は立命館大学のメンバーからの報告です。報告3はこれまでの司会の吉岡さんで、タイトルは、「障害学生支援を開かれたコミュニケーションの場へ～行動分析学に根ざした方法論的な展開」、よろしくお願いします。